

学力層別の補習や通知表の活用で 全ての学力層にきめ細かく対応

東京都立川市立立川第一中学校

立川第一中学校は、学力の向上、学習意欲の二極化の解消を目指し、2012年度から授業、補習、評価に至る幅広い改革に取り組んできた。学力層に応じたきめ細かい補習、学期ごとの振り返りの工夫により、学ぶ意欲の醸成、都平均を上回る学力向上を実現している。

◎課題意識

下位層向けの補習は 教員個々の努力任せ

立川第一中学校では、2012年度から2年間、立川市の学力向上推進研究校の指定を受け、**授業改善、学習機会の拡充、学習意欲の向上**を柱とする改革を進めてきた。当時、同校の学習面の課題は各種調査からも明らかだった。11年度の東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、各教科とも都の平均正答率を下回り、同校が実施した「生徒による授業評価」では、学習に前向きな集団

とそうでない集団との二極化が顕著だった。校区の小学生の学力上位層は私立校に進学する状況が続き、学力向上への期待を学校よりも塾に向ける保護者もいた。改革前後を知る主幹教諭の田野倉宏美先生はこう振り返る。「授業は中位層に焦点を当てていたので、上位層は時間を持て余し、下位層は授業に付いていけずに意欲をなくしていました。肝心の下位層の底上げを図るための補習は、教員個々の努力に任されている状態でした」ところが、國島健二校長は12年度の赴任後すぐに生徒の潜在能力の高さを感じ取った。「集会で話を聞く態度を見て、この生徒た

School Data

◎ 1947（昭和22）年に開校。
2013、14年に東京都学力向上パートナーシップ事業調査研究校、14年度から立川市教育力向上推進モデル校に指定。「公立学校は地域の財産」を経営理念として生徒・保護者の満足度向上を重視する。



校長◎國島健二先生

生徒数◎ 399人 学級数◎ 14学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒190-0023 東京都立川市柴崎町1-3-4

TEL◎ 042-523-4328

URL◎ <http://www1.m-net.ne.jp/dai1/>

事業成果報告会◎ 2015年1月27日（火）予定

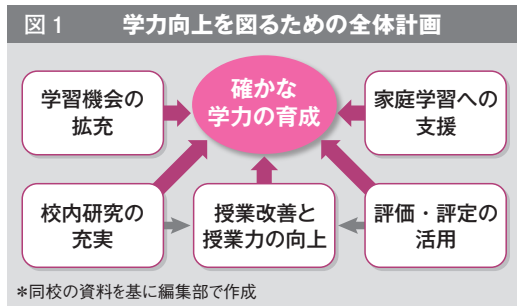
ちならもつと学力を伸ばせると直感しました。生徒が力を出し切れていなかった最大の原因は、学習に向かう動機付けを学校が十分に行っていなかったことにあると思います。やれば出来るという達成感や成功体験を積みませ、学力・学習意欲の向上を図ることで本来の力を引き出せると考えました」

◎学習機会の拡充①

定期考査前の集中補習で 「やれば出来る」を実感させる

改革の全体像は図1のとおり。「授業改善と授業力の向上」を中心に、「学習機会の拡充」

広がる学力格差への多様な取り組み



「最大のねらいは、勉強の成果を実感して学習意欲を高めることです。国語

「家庭学習への支援」「評価・評定の活用」「校内研究の充実」と、あらゆる学習場面を通して生徒の潜在能力を引き出していくものだ。最大の特徴は、学力層に応じたきめ細かい指導にある。対象とする学力層を明確にし、それぞれの現状の学力・学習意欲を見極めた上で、自立的な学びへ導くために最適な指導方法・形態を考えていく。その軸となるのは、定期考査前に行う「**ステップアップ教室**」だ。「復習授業」「自主学習」の2コースに分け、基礎学力の定着を目指す補習である。中位層の中の下位の生徒を対象にした「**復習授業コース**」は、定期考査前の1週間、放課後の1コマで行う。国数英理社の5教科で、日頃のテストの結果を基に各教科20人前後の生徒を指名し、1日1教科を日替わりで実施する。内容は試験範囲のダイジェストを基本とし、どの教科も短期の学習で結果が出やすい内容に特化している。国語科の茨裕美先生は次のように話す。

では、読解力のように継続的な学習が必要な分野は難しいので、文法や古典など、取り組みれば成果が出やすい内容に重点を置き、「出来た」という達成感を味わわせることを意識しています」

「**自主学習コース**」は、復習授業コースの授業にも付いてこれられないような最下位層と、自分で課題を見付けられる中・上位層が対象だ。生徒自身が決めた教材で学習を進め、必要に応じて教員が質問に答える。2人の教員が監督を担当するが、実際には他に大半の教員が個別指導に加わる。

復習授業コースで成果が出たことで、次の参加を希望する生徒も多い。そうした生徒には、補習で使うプリントを渡して「分からなかったら質問に来なさい」と、自主学習コースへの参加を促す。14年6月のステップアップ教室の参加率は1年生88%、2年生85%、3年生77%と、最上位層を除いてほぼ全員が参加しているのも、生徒の満足度の表れだ。「やれば出来る」という成功体験、「皆が頑張っているから自分も頑張ろう」という連帯感が、自ら学びに向かう意欲を高めている。

●学習機会の拡充②

最下位層向けの補習や生徒全員が受ける夏季補習も好評

12月に行う「ビルドアップ教室」は、1・2年生の最下位層を対象とした個別補習だ。

立川市立立川第一中学校 校長
國島健一 くにしま けんじ
「公立学校は地域の財産」をモットーに、生徒・保護者の満足度、地域の信頼度を高める教育を展開したい」

立川市立立川第一中学校
田野倉宏美 たのくら ひろみ
主幹教諭。副校長補佐、生活指導主任。「一つひとつの仕事を手堅く務め、校長と先生方をつないでいきたい」

立川市立立川第一中学校
多田春美 ただ はるみ
主幹教諭。教務主任。学力向上推進担当。「自分にも生徒にも厳しく。間違っていることは躊躇せず叱る」

立川市立立川第一中学校
荒井英樹 あらい ひでき
主幹教諭。学習進路指導主任。研究主任。「生徒が1つでも分かったと感じる授業を目指す」

立川市立立川第一中学校
茨裕美 いばら ひろみ
主幹教諭。学力向上推進副担当。「生徒と積極的にかかわり、たくさん声を掛け、会話することを大切にしている」

三者面談期間の5日間、放課後に105分間、期間中の課題として配布される自宅学習用プリントを使い、副担当が生徒個別に自学の手助けをする。13年度1年生の2学期末考査では、この補習を受けた生徒全員が、数学・英語で中間考査の結果を大幅に上回った。それに手応えを感じ、以降の補習にも積極的に出席する生徒が増えている。

これを受けて、14年度は最下位層への継続的な指導を行うため、数学・英語の成績不振者を対象とした月2回の「水曜学習教室」も始めた。このように、効果のあった取り組みはすぐに拡充・定着させていくフットワークの軽さが、生徒の学力向上を支えている。

上位層から下位層まで全生徒を対象とする補習が「サマースクール」だ。夏季休業前の6日間、ほぼ全教科で選択制の99講座を設ける。国数英は、小学校段階の学習内容の復習から、高校受験に必要な発展的な内容まで、幅広く網羅する。同校の全教員が指導に当たるほか、小学校の復習は小学校教員、発展的な内容は塾講師にも指導に入ってもらう。もちろん、受講費は無料だ。生徒は、各学年30前後の講座の中から選ぶことも楽しんでいて、13年度は前年に比べて、全学年で生徒が参加するコマ数が増えた。ここにも、学校の求心力が高まっている様子がうかがえる。

● 教員の負担を減らす工夫

外部人材の活用と教育課程の工夫で 全校体制の指導を実現

指導内容の工夫と共に、教員の負担感を減らし、指導や校務に当たる時間を増やすことも、取り組みの成否のポイントとなる。

その1つが**外部人材の活用**だ。サマースクールでは、小学校や塾と連携して講師を派遣してもらう。水曜学習教室や定期考査前に

実施する土曜学習教室では、他校の非常勤講師や大学生を学習支援員として招いている。國島校長を始め、教員の人脈を活用して人材の確保に努めた。

もう1つのポイントは、**教育課程の工夫**だ。例えば、ステップアップ教室は、13年度までは6時間目の後に実施していたため、教員だけでなく、生徒の負担も大きかった。そこで14年度は、6時間目をなくし、補習の時間に充てることにより、**教員全員が指導**できるようになり、参加率も大幅に高くなった。なお、削減した授業時間分は、土曜日と、夏季休業期間を短縮して補充している。

サマースクールの日程も工夫した。同校の夏季休業は7月25日～8月26日。以前は夏季休業直後と終了直前の各3日間で、サマースクールを行っていた。14年度は、夏季休業直前の6日間に集中させ、午前中は通常授業、午後にサマースクールを設定した。この日程変更は、時間割の作成や講師の確保にも良い影響をもたらしていると、主幹教諭の多田春美先生は指摘する。

「夏季休業中に補習を実施すると、教員の希望日時を集約するのが大変で、かつ塾の夏季講習とも重なるため外部講師の確保が容易ではありませんでした。夏季休業前にまとめて行うことで、それらの問題が解決できる上、外部講師が指導に当たる時間帯には、教員は校務に専念できるようになりました。後半の

3日間は通常の学校が夏休みに入っているため、その期間に小学校教員を招くことが出来るのもメリットです」

サマースクールの参加率は、前年比で、3年生38%↓51%、2年生43%↓73%に増えているのも、こうした日程上の工夫によるところが大きい。

● 評価・評定の活用

終業式3日前に通知表を渡し すぐに反省と目標を考えさせる

学力層の拡大への対応では、教員が補習や家庭学習を手厚く指導するだけでなく、生徒自身が学習上の課題を把握し、自ら解決していく姿勢を養うことも大切だ。同校では、そうした生徒の課題発見・解決力の向上をねらった評価・評定の活用にも力を入れる。

課題発見のために欠かせない手法が、各教科で作成している**シラバス**だ。同校ならではの特徴は、各単元の指導目標や評価の観点に加え、ノートや小テストなどの評価材料、観点ごとの割合を示している点にある。各学期の冒頭に配布し、各教科が何を生徒に求めているのかを、最初の授業で詳しく解説する。研究主任の荒井英樹先生は次のように話す。

「詳細なシラバスの作成は大変ですが、立川市教育委員会に提出が義務付けられている年間指導計画の書式を同じ形にすることで、負担軽減を図りました。いったん作成すれば、

広がる学力格差への多様な取り組み

図3 「振り返りシート」



評価方法を「評価説明資料」から選び、頑張れたことは○、頑張れなかったことは×として、次の目標を書かせる
* 同校の資料を基に編集部で作成

* 2点共、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでも拡大してご覧いただけます。<http://berd.benesse.jp> > 教育情報 > 中学校向け

図2 「評価説明資料」1学年国語の例

学習内容	観点	評価材料	評定に対する割合
4 いにしえの心に残る 漢文や書に由来する言葉 文法「だ・が・何・を・どうするぞ」	【聞く・読む・書く】	口頭発表(授業ノート、漢字ノート、ワーク)	10%
		ワークシートへの記入 口頭発表への録音録画(授業録画、動画) 口小テスト(漢文)への録音録画 *録音への録音録画	2%
5 論点をとらえる 役割「漢文と私たちの暮らし」 漢字「漢字の音読み」	【話す・聞く】能力	口頭発表ワークシート 口頭発表への録音録画(授業録画、動画、動画) *スピーチ	10%
		口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
6 漢字を見つめる 示語「少明の日の思ひ出」 文法「全の類のまで」 漢字「漢字の読み方」	【書く】能力	口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
漢字(漢字・音読み)	【読む】能力	口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
漢字(漢字・音読み)	【読む】能力	口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 ワークシート、ワークシート 口小テスト *録音	2%

学期冒頭で配布したものに、評価材料ごとの割合を加えたり、評価材料に用いなかった項目を二重線で示したりしている
* 同校の資料をそのまま掲載

後は日々の授業の様子から、若干の修正を加えるだけなので大きな負担にはなりません」
学期末には、シラバスの評価方法欄に「授業観察2%」「ワークシート5%」など、更

改革の成果は学力向上の形で明確に表れている。東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」は改革2年目で都の平均正答率を超え、国語、数学、英語の3教科は知識・技能、思考・判断・表現のいずれも大きく向上した。「生徒による授業評価」から読み取れる学習意欲も、13年度は前年比で国語49% ↓77%、英語46% ↓78%と改善し、補充教室の参加率も大幅に向上した。14年度に立川市の全公立中学校で外部人材登用のための特別

継続的な人材確保と 小中連携が今後の課題

● 成果と課題

に詳細な割合を加えた「評価説明資料」(図2)を作成し、終業式の3日前に通知表(学習の記録)と共に配布する。生徒はこれらを見ながら、「振り返りシート」(図3)に各教科の反省、次の学期に向けた目標などを記入し、終業式までに担任に提出する。担任はそれを全てチェックし、反省すべき点に気付いていない生徒、適切な目標設定が出来ていない生徒に対しては個別に、「ノートが提出できていなかったからCではないかな」などとアドバイスする。友だち同士でシートを見せ合い、なぜ評価が低いのかを分析する姿も見られるという。評価方法の開示と振り返りが、課題の発見と解決方法を考えるきっかけになっているのである。

予算が計上されたのも、同校の取り組みの影響が大きいという。校区の小学校から同校に進学する上位層も確実に増えている。

一方、課題もある。1つは継続的な人材確保だ。「現在は研究指定を受けているため資金は潤沢ですが、この状態が続くとは限りません。ボランティアを公募するなど、今以上に外部人材の確保に工夫を凝らす必要があります」と多田先生は強調する。もう1つは、13、14年度に指定を受けた東京都の「学力向上パートナーシップ事業」に基づき小中連携を深化させることだ。

「小中連携を一過性のもので終わらせず、学力向上につながる取り組みに発展させていくことで、本校も更にステップアップしていくと期待しています」(國島校長)

國島校長が考える 学力二極化への対応

学力や意欲の二極化を始め、現在の学校課題に対応するためには、教務・生活・進路という従来型の組織では限界があります。本校では、主幹教諭を「学力向上」「評価」など分野ごとの特命担当に任命し、企画立案から実践まで任せています。その前提として、担当授業時数を軽減するなど、十分に能力を発揮してもらうための環境整備も行っています。先生方に活躍の場を与え、次世代のリーダーを育てることが、持続性のある学校運営に欠かせないと思います。